

地域の資産としての文化的景観



略歴
東京大学法学部卒、シドニー大学経済学修士、東京大学博士
2001年より現職
【専門】文化政策、文化遺産保護、都市計画、公共選択
【出版等】「文化財政策概論」(共著:東海大学出版会 2002)
「クリエイティブな学習空間をつくる」(共著:ぎょうせい 2001)
Us-Japan Comparative Study on Cultural Policies (共著:Alta Mira Press 1998)
「田園の発見とその再生」(共著:晃洋書房 1998)
【受賞】2002年度日本都市計画学会論文奨励賞(「CTMを用いた文化政策の定量的評価」)

一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授

垣内 恵美子



合掌造り家屋 (相倉集落)

■ はじめに

今日、ものを大切にす時代から心の豊かさを求める時代へと変わり、従来必ずしも重要と考えられてこなかった文化遺産、町並み、歴史的建造物や芸術、アメニティといった文化的資源が、地域の貴重な資源として認識されるようになってきています。

日常生活の質の向上への要求の高まりと地域文化への回帰、大型公共事業を中心とする地域開発から個性を生かしたまちづくりが求められるようになり、地域にあっても、文化と開発の関係は、対立から補完、共存へと変化しました。また文化観光、文化産業の潜在的な能力も注目されてきています。これに伴い、文化資源の維持管理のあり方も、例えば文化財の凍結保存からより柔軟で多様な保存・活用へと変化しました。

ここでは、景観を文化的資源の一部と考え、以下に紹介する2つの事例を通してその価値と維持管理のあり方について考えてみたいと思います。

■ 村の宝は国の宝、世界の宝(富山県五箇山合掌造り集落)

1) 合掌造り集落

平家落人伝説でも知られる富山県五箇山合掌造り家屋は、中部山岳地帯にあって、周囲の自然環境や地場産業に適合して発達したきわめて合理的な民家であり、日本の木造文化を代表するものです。この伝統的な合掌造りの集落は、1950年代から70年代にかけての急激な経済社会の変化の中で激減し、富山県五箇山地方と岐阜県萩町白川郷を残すのみとなりました。

これらの合掌造り集落は、その文化的、歴史的価値により、重要伝統的建造物群保存地区選定(白川郷は1976年、五箇山は1994年)、及び世界遺産登録



菅沼集落遠景（冬）



相倉集落遠景（夏）

(1995年)がなされており、このうち本稿で紹介する富山県五箇山地方には、平村相倉集落、上平村菅沼集落の2つが存在しています。規模は小さく、相倉集落は戸数27戸、菅沼集落は10戸、そのうち合掌造りはそれぞれ20棟、9棟となっています。多くの建物が200年から400年前に建てられたもので、伝建建物が全建物の8割を占め、文化財保護法上の史跡指定(1970年)も受けています。これらの集落は、史跡としての様々な保護を受けるとともに、原則として現状を変更することができないという強力な私権の制限の下、できる限りそのままの形で存続する方針を貫いてきました。

2) 集落の現状

相倉、菅沼の両集落では、史跡指定後、建造物戸数の減少は食い止められたものの、集落の高齢化、過疎化は緩慢ながら進行し、集落を維持してきた「結(ユイ)」などの社会的構造も変化しました。

観光関連世帯の増加、高齢世帯を中心とした転出など、世帯・人口が減少していく中で、相倉集落では、将来にわたって文化遺産としての価値を継続し、無制限な観光地化を回避し、地域が持続して存続す

ること、すなわち「文化財である相倉」と「静かで住みやすい相倉」の両立に取り組んでいます。現在、相倉集落では保存財団を作り、文化遺産保護を内容とする雇用創出を目指して、世界遺産登録後急増した観光客の駐車場の整備と交通整理、協力金の集金、民俗館の管理を主として行っています。

一方、菅沼集落では教育施設や宿泊体験施設を別途集落とトンネルで結んだ隣接地に展開することにしました。

3) 景観保存にいくら払ってもいい?

生活上の不便があっても、集落をできる限り現状のまま保存していきたいと考える住民の強い意志があってはじめて今日まで集落が続いてきたわけですが、人々が住んで生活している「生きた史跡」である集落を保存するためには、様々な維持管理が必要です。例えば定期的な屋根の葺き替えやそのための茅場の整備、労力の確保と屋根葺き技術の伝承などのほか、農地や雪持林の整備、集落を囲む周辺山林河川などの自然環境の保全も不可欠です。そこで、このような自然環境とも調和した文化的な景観である集落景観を保存することに関するCVM法を用い



合掌造り内部



相倉集落屋根修繕



菅沼集落近景



黒壁ガラス館



ガラス鑑賞館内観

た支払い意志額調査を2001年に実施しました。

紙面の制約上、調査の詳細は省略しますが、相倉集落、菅沼集落の文化的景観をそのまま保存していくために、集落を訪れる観光客が支払ってもよいと考える平均的金額は、1世帯当たり、約2万円 (Mean WTP:19,941円) でした。また、半数が支払っても良いと考える金額 (中央値) は約3千円 (Median WTP:3,117円) となっています。両集落のある平村、上平村に全国から訪れる観光客は年間のべ80万人とも言われています。これだけ多くの訪問者に対し、集落の景観は大きなベネフィットを与えているといえます。

また、同様に全国調査も実施しましたが、結果は平均で約1万円 (Mean WTP:10,345円) となり、半数の人々は1,800円以上支払ってもいいと回答しています (Median WTP:1,885円)。仮に、平均値に全国の世帯数を乗じてみると、総額で4,800億円程度となります。つまり、合掌造り集落は、全国の多くの人々がかなりの金額を支払ってもこのまま保存したいと考える、そういう景観であるといえるでしょう。

4) 集落景観の価値

一般的に、景観は対価を支払って見るものではありません。しかし、仮に、金銭的価値に換算すると、この集落景観の美しさ、そして文化的・歴史的価値を保存することに対して人々はかなり大きな金額を支払ってもよいと考えているといえます。では、それはなぜでしょうか。もちろん実際集落を訪れて、その文化的、歴史的な景観を体験し、楽しむということがまず考えられます。しかしながら、先の調査で判明したことは、人々は、この集落への訪問経験や、将来来るかもしれないからという理由 (オプション価値) によって景観保存のためのお金を出そうと思っているわけではない、ということです。む

しろ、将来世代に残したいという気持ち (遺贈価値)、そして、そこに集落が存在するだけで素晴らしいと思うこと (存在価値) が支払い意志と有意な相関をもつということが明らかになりました。これは観光客として集落を訪れる人々にも共通しています。

また、支払い意志額には、居住している地域や学歴、職業、性別といった属性とは相関していないことから、景観によってもたらされるベネフィットは、国民のある層に限定されることなく社会全体に広がっているといえます。

さらに、現地を実際に訪れる観光客の一部は、金銭的負担のみならずボランティアなどの労働力提供にも積極的であり、合掌造り集落の文化的景観は、公的支援に加えて、関心が高く文化的価値に敏感な観光客によって支えられる可能性もあると考えられます。そして、そのためには、集落に関する情報提供や学習機会の提供などのアウトリーチ活動によって潜在的支援者を掘り起こす努力が関係者に求められるでしょう。

■ 芸術的ガラスとガラス街道 (滋賀県長浜市黒壁スクエア)

1) 滋賀県長浜市と (株) 黒壁

滋賀県長浜市は、滋賀県の湖北に位置し、琵琶湖に面した港湾を有する商工業都市で、人口約6万人、かつて、豊臣秀吉が長浜城を築き、真宗大谷派の長浜別院大通寺の門前町でもあります。明治に入っすぐに鉄道が開通、滋賀県で最も早く銀行や学校が建設され、戦前からの紡績工業、戦後の化学工業など商工業中心に繁栄してきましたが、1970年代以降、モータリゼーションや人口の郊外拡散化、大型店舗の進出などによる中心市街地の衰退といった問題に直面しました。



ガラス鑑賞館



ガラス鑑賞館内観

これに対し、市民の寄付を中心に1983年長浜城が再興されて以降、様々な文化的事業が展開されるようになり、1984年に策定された「博物館都市構想」、1994年の「新博物館都市構想」により、中心市街地を活性化するための手法として観光と文化を取り上げるようになりました。大通寺の表参道のセットバックと共通外観の整備、商店街のファサード改修、北国街道の石畳化など、多くの事業を手がけてきた中で、大きくブレイクしたのが(株)黒壁です。長浜市は現在、関西、中部、北陸の結節点として、年間約500万人を超える観光客を受け入れています、その約4割が黒壁訪問者です。

2) 1時間で人が4人と犬1匹

(株)黒壁は、1988年4月長浜市4,000万円、民間企業8社9,000万円の出資によって創設された第3セクターで、芸術的ガラス産業と、登録文化財を中心とする文化的景観を組み合わせたユニークな活動で中心市街地の活性化に成功した事例といわれています。

黒壁スクエアは、長浜市の中心に位置する商店街のうち、北国街道と長浜城大手門通りが交差する一角にある旧第百三十銀行の建物、通称「黒壁」を中心に広がる一角です。



黒壁ガラス館以前の教会

「黒壁」の名称は、その黒漆喰塗りの壁に由来し、戦後はカトリック教会として使用され、教会の移転計画とともに取り壊される予定でしたが、築後100年を経過し、洋館で黒漆喰、土蔵造りという全国的にも貴重な存在であり、長浜のシンボリック建物であったことか

ら、市民の間で保存の声が上がりました。進取の気性あふれる長浜の町を再興し、商店街活性化の拠点とすべく、第3セクター(株)黒壁が買い取り、中心的な店舗としたものです。

(株)黒壁は、商店街の取り扱い業種との競合を避け、大企業では取り扱うことのできないニッチ市場に焦点化し、かつ来訪者増加につながるインパクトのあるものということで、歴史性、文化芸術性、国際性の3つのテーマを兼ね備え、日本ではまだ未成熟な潜在市場を期待できるガラスを選択しました。

また、黒壁の建物の周辺300mから500mほどの間には、江戸から明治にかけて建てられた古い家屋が80軒程度残っており、これらの空家や老朽家屋をガラスのコンセプトと結びつけてリニューアルし、街道の景観を創造しつつ多様なガラスショップを増設しました。

かくして(株)黒壁は、1時間に「人が4人と犬1匹」しか通らなかったといわれた商店街のシャッターを開け、2002年度には(株)黒壁直営店だけで年間8億円強を売り上げるとともに、黒壁スクエアを訪れる観光客は210万人を超えました。



ガラス鑑賞館以前



札の辻



札の辻内観

3) 経済波及効果は？

(株)黒壁及び黒壁スクエアの魅力は、芸術的ガラスとそのコンセプトに沿った景観創造にあるといえます。この景観は多くの訪問者をひきつけ、その観光消費だけでも地域コミュニティに様々な影響を与えています。

では、これらの活動や多くの観光客の来訪を、市民はどのように見ているのでしょうか。住民意識調査(1996年実施)によれば極めて好意的に評価されており、黒壁スクエアは、地域の活性化やイメージアップに貢献し、新名所として認知され、町並み保存や、文化的水準を上げたといったプラスの評価のほか、経済的効果も指摘されています。

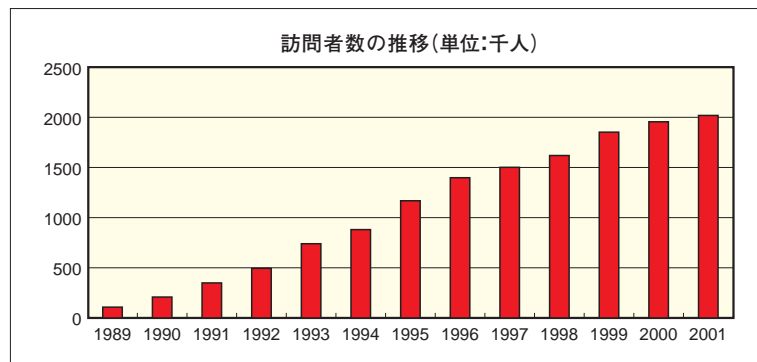
ここでは、特に経済波及効果を詳細にみてみましょう。1995年の産業連関表によるため、1995年1年間のみの推計ですが、黒壁を目的に訪れた観光客に限定しても、(株)黒壁直営店で直接消費する金額は約6億9,000万円、黒壁スクエア及び近隣商店街において消費する金額が約3億円、駐車場代金として約5,900万円、宿泊する客はホテル代として4億6,000万円を使ったと考えられます。

これらの分析は、控えめな基礎データを用いて



札の辻以前のお店

行っているのです、値は最小値と考えられますが、それでも黒壁スクエアを中心とする近隣商店街も含めた中心市街地に非常に大きな経済的効果をもたらしていることがわかります。さらに、これらの直接消費から滋賀県全域における波及効果を推計した結果は約23億円となりました。この経済波及効果のかなりの部分は地元長浜市を中心とする地域に集中していると考えられます。



ラッテンベルグ館以前の店舗



ラッテンベルグ館



ラッテンベルグ館内観

中心市街地活性化は、長浜市の長年にわたる主要政策課題であり、既に述べたように同市は多くの投資をしてきていますが、空き店舗の買い取り、改修なども含め(株)黒壁が行う活動に関する公的支援は、先に述べた出資金(当初4,000万円、後に1億円を増資、合計1億4,000万円)のみです。この点からだけでも、毎年数十億円規模の経済波及効果を継続してもたらず(株)黒壁に対する長浜市の出資は、極めて効果的な「投資」であったといえるでしょう。



長浜市 市街地図

■ 景観は資産？

世界遺産、史跡として現状維持の方向を選んだ合掌造り集落の景観と、外観、内装とも柔軟に保存活用を図る登録文化財を中心に芸術的ガラスのコンセプトを加えた黒壁スクエアの景観、一見非常に異なる2つの景観には、共通点があります。①景観は地域の人々のアイデンティティのよりどころであり、②遺贈価値や存在価値や、地域が生き生きしてきた、イメージがよくなったといった、市場では取引されない価値を有し、③集落への雇用創出や観光消費による経済的効果などをもたらす、まさに地域の資産といえます。

このように様々な価値を生み出す資産であれば、当然その価値を維持し高めるための管理、保存、そ

して適切な活用が重要です。

UNESCOの世界遺産委員会では、文化的景観を、自然と人間の相互作用の結果であり、生きている文化や伝統など人間の諸活動に関わるあらゆる自然的、文化的要素を相対的に「景観」として捉え、そこに居住する人間の生活の証として位置づけています。

合掌造り集落も黒壁スクエアも同様にこのような文化的景観といえるでしょう。そしてこれら文化的景観は、当然、絶えず変化する存在であり、地域住民の参加による生活向上のための基盤整備や、伝統芸能、習俗、地域コミュニティの保全も含めた具体的かつ総合的な文化資源としての保護が必要です。

■ 景観は誰のために

文化的景観は、地域コミュニティ、そこに住んで生活を営む人々の有形、無形の活動の総体であり、地域伝統のよってたつところとして大きな価値を持っています。したがって、一義的には地域の人々のイニシアティブと責任により、守り、育てていくものといえます。

しかしながら、文化的景観は、かの地に訪れる人々、さらには自ら訪れることがない人々にまで様々なベネフィットをもたらす、社会的に大きな価値を有するものでもあります。その意味では、地域の資産であると同時に、他の地域の人々あるいは将来世代といった時空を超えた価値を有するともいえます。

そして、このようなベネフィットの受益者を代表する国や地方公共団体などの公的機関、訪問者や関心を有する人々など多くの主体が地域住民と一体となって、文化的景観の価値を高め、維持していく必要があると考えられます。